

れた際には PVB19 感染を考慮する必要があると考えられた。

3. 爪部 Bowen 病における human papillomavirus 感染の検討

清水 晶, 田村 敦志, 安部万理絵
茂木精一郎, 永井 弥生, 石川 治
(群馬大院・医・皮膚病態学)
中谷 陽子, 星野 洪郎
(群馬大院・医・分子予防医学)
上里 博 (琉球大学皮膚科)

爪部 Bowen 病はまれであり human papillomavirus (HPV) との関連を検討した報告は少ない。当科で経験した爪部 Bowen 病 5 例のウイルス学的, 組織学的, 臨床的検討を行った。切除標本から DNA を抽出し, L1 領域のコンセンサスプライマーで PCR を行った。5 例中 3 例でバンドが検出された。増幅した 250 塩基対の DNA をクローニングしシーケンスを確認したところ, ハイリスク型 HPV に属する HPV56 が検出された。2 例には silent point mutation があり, 残りの 1 例は HPV56 の consensus sequence と同一であった。さらに HPV56 E6 領域の特異的なプライマーを用いて PCR を行い, 配列を確認したところ同じ 3 例で HPV56 が検出された。Silent point mutation を認めた 2 例と残りの 1 例は, E6 領域の配列比較により, 別の HPV 56 variant グループに属し, またこの 2 つのグループは系統樹では比較的遠いグループに分類されることが分かった。HPV DNA の組織学的局在については in situ hybridization で検討し, ウ

イルス DNA をケラチノサイトの核内で検出した。HPV56 陽性の 3 例とも爪甲色素線条を呈しており, 爪母における HPV56 感染を示唆していた。また, HPV56 陰性の 2 例は爪甲隆起と爪囲の潰瘍を呈しており, それぞれ爪床, 爪郭の病変と思われた。ウイルス学的な系統樹解析により比較的遠い HPV56 variant グループに分類される 2 グループの HPV56 がいずれも爪甲色素線条という共通の臨床像を有する病変を呈したことから, HPV56 は爪母上皮に感染して発癌性を現すウイルスである可能性が示唆された。

〈特別講演〉

座長：石川 治 (群馬大院・医・皮膚病態学)

ヘルペス性皮膚疾患の治療

安元慎一郎

(久留米大学医学部皮膚科 准教授)

抗ウイルス薬による治療が効果的なヘルペスウイルスによる皮膚疾患には, 単純ヘルペス, 水痘, 帯状疱疹などがある。ウイルスの増殖を抑制するという作用機序からは発症後なるべく早期に開始することが望まれる。ごく最近, 繰り返し再発を繰り返す性器ヘルペスに対する抑制療法が保険適応となり, 水痘に対してはバラシクロピルの内服療法が可能となった。また, 帯状疱疹あるいは帯状疱疹後神経痛の予防的治療として水痘ワクチンが有効であるとの報告もなされている。ここでは, ヘルペス性皮膚疾患の治療について話題を中心に概説する。